日本YWCAの使命（ミッション）
イエス・キリストに学び、共に生きる世界を実現する
世界の人々と共に人権・平和・環境の問題に取り組む

第29総会期主題
平和を実現する人々は幸いである―マタイによる福音書5章9節

日本YWCAビジョン2015
（1）非核・非暴力による平和を構築する
・平和憲法をまもり、世界に広める
・市民レベルで東北アジアの信頼関係を築く
・女性と子どもの権利をまもる
・パレスチナYWCAの活動を支援する
（2）若い女性のリーダーシップを養成する

YWCA 10
OCT. 2008

発行所 日本キリスト教女子青年会
〒102-0074 東京都千代田区九段南4-8-8
Tel. 03･3264･0661
【四谷オフィス】
〒160-0008 新宿区三栄町6-12 2F
Tel. 03･5367･1872／FAX 03･5367･1873
E-mail. office-japan@ywca.or.jp
編集発行人 石井摩耶子
振替 00170-7-23723（毎月1日発行）
定価1部 150円
年間購読料2,200円（送料込）
www.ywca.or.jp

YWCA非暴力週間
YWCA Week Without Violence
10月13日～19日

毎年10月第３週の非暴力週間は、女性への暴力をなくすために世界中のYWCAで一斉に実施されるキャンペーンです。この期間中、世界各地のYWCAが、地域社会に向けてさまざまな方法で非暴力の大切さを発信します。

「恋愛」の名の下に
デートDVの実情

7人に1人―2006年の内閣府調査で明らかになった、10代から20代の女性のうち恋人から暴力を受けたことがある人の数である。その被害は若者の間で今も急速に広まっている。恋人同士の間に起こる暴力、デートDVとは何か、その実情と対策を探る。

デートDVという一見軽さを含んだ言葉は、その被害の深刻さを時に隠してしまう。しかし現状は、決してそうではない。別れればいい、そういう問題でないことを私たちはまず理解しておかなければならない。デートDVは、若者の間でも理解に乏しい。恋愛の名のもとに、暴力は極端に気付かれにくい。

デートDVは、殴る蹴るといった身体的暴力だけでなく、侮辱・非難するといった精神的暴力、性行為を強要するといった性的暴力など、さまざまな方法で相手の自由を奪い支配することである。加害者は自分の思い通りにならないことを、暴力という手段を使って相手に訴え、あくまで自分は悪くない、これは相手のためなのだと言い訳をする。被害者は恐怖と混乱の中、自分の意思を捨て加害者を怒らせないように生きていくしか道がないように錯覚する。自分が悪いと信じ込まされている被害者は、暴力を振るう加害者でなく自分を責めながら、力なく我慢し続ける。その関係から逃れるには大きな勇気とパワーが必要であり、逃れた後もなくなってしまった自分を取り戻すのに多くの努力を費やさなければならない。

尽くす女・守る男―女性の社会進出も増加し、男女平等の意識が広く浸透する若者の世代でさえも、恋愛において求められる男女の役割意識は根深く存在する。友だちにはNoと笑って言える子も、恋人にはNoと言えなかったりする。性の低年齢化が進んでも、恋愛について学ぶ場は、学校でなく家庭でもなく、幻想に溢れるテレビや漫画だ。それを幻想とは知らされぬまま育った若者が、今苦しんでいるのだ。

私たちはこの現状を身近な問題として受け止める必要がある。そして若者に、恋愛幻想の多くの誤りに気付くことの大切さを伝えていく必要がある。尽くさなくてもいい、守らなくてもいい。互いの価値観を認め、尊重し合える関係が大切であることを伝えていくべきなのだ。自分を大切にし、相手も大切にする。そのどちらが欠けてもいけない。一人でも多くの若者が、デートDVの怖さを知り、尊重し合える素敵な恋愛を知ることを願う。

名古屋YWCA　大杉朱美

＊DV…ドメスティック・バイオレンス（DV）は、夫婦や恋人などの親密な関係における暴力を指します。

子どもポルノ・買春の根絶を目指して
第３回世界会議、今秋ブラジルで開催

子どもの商業的性的搾取に反対する世界会議は、1996年にストックホルムでの第１回、2001年の横浜での第２回に引き続き、「子ども・未成年の性的搾取に反対する世界会議」と題して本年11月25日～28日にリオデジャネイロで開かれます。第３回会議も前回と同様に、ホスト国のブラジル政府・国連児童基金（ユニセフ）・国際NGOである「ECPAT（エクパット）」と「子どもの権利条約NGOグループ」の４者の共催です。ユニークな形態を持つこの国際会議は、主催者のみならず参加者も、政府・国際機関・NGO・市民・企業など多彩です。中でも、子どもたちは会議の構成者として大きな役割を担っており、今回も300名の参加が予定されています。

第１回会議では、122カ国の政府・NGOが参加し、2000年までに各国に防止のための国内行動計画の策定を求める「宣言と行動綱領」を採択しました。第２回会議は、136カ国の政府・23の国際機関・283の内外NGOの参加があり、国内行動計画の策定（前回会議で対応の鈍さが際立った日本も、1999年に児童買春･児童ポルノ禁止法を施行）の進捗報告がある一方で、人身売買などの犯罪の国際化やIT技術の発達に伴う新たな問題がとりあげられています。

子どもと未成年者を性的搾取から守るためには、国を越え、組織を越えた連携がますます必要となっている現在、第３回世界会議の目的も、各国が対策や経験を分かち合い、国家間および国境を越えてより広範な国際協力とさまざまなセクター間の協力を促進し、取り組み状況をモニタリングできるよう期限を定めた目標を立てることにあります。会議では、①商業的性的搾取の新たな局面、②法的枠組みと法執行、③セクター間の統合的な政策、④民間セクターの役割と企業の社会的責任、⑤国際協力のための戦略などをテーマに話し合われます。

第２回会議で挙げられた、インターネットで大量に発信される子どもポルノの問題はさらに深刻化を増し、世界的な問題となっています。日本YWCAも呼びかけ人の一人となって児童買春･児童ポルノ禁止法の改正などを求める「なくそう！子どもポルノキャンペーン」を進めており、臨時国会での成立を願って現在も署名活動を続けています。ネット署名（http://www.unicef.or.jp）も可能ですので、引き続き署名へのご協力・呼びかけをお願いします。

「ECPAT／ストップ子ども買春の会」
運営委員会議長・東京YWCA会員　坂口和子

＊第３回国際会議の詳細は、国際ECPATのHP（英文）をご参照下さい。
（http://www.ecpat.net/WorldCongressⅢ/）

女性に対する暴力の根絶に向けて
福嶋由里子

YWCAでは、10月の第3週をWeek Without Violenceと定め、世界各地で女性に対する暴力根絶キャンペーンを展開しています。この運動は、1995年にアメリカのYWCAが、ドメスティック・バイオレンスやレイプ被害者の急増を背景に、女性に対する暴力に関する啓発活動を始めたのがきっかけとなり、世界各地に広まっていきました。

その内容は、単にポスター等を作るだけではなく、人々がこの問題を身近なものと認識し、問題に対応できる力をつけられるような、簡単なトレーニングマニュアル等をインターネットで配信したり、職場や学校にYWCAのメンバーが赴いて、セミナーを行ったりしています。また、さまざまな人にコメントを書いてもらい、それらを、図書館や商店街等、街中の人の目が集まりやすい所に貼り、一人ひとりが女性に対する暴力を予防できることを促すという活動もされています。

扱うテーマとしては、近年は、若い世代における恋人からの暴力（いわゆる「デートDV」）や、暴力とHIVの関連性に焦点が当てられ、10～20代の女性たちが直面している暴力について知るイベントや、若者会議などが行われています。

日本では、ドメスティック・バイオレンス（DV）という言葉は浸透し、法制度も徐々に整備されてきましたが、デートDVに関しては、まだ被害の深刻さに気付いている人は少なく、法的保護制度も不十分な状況です。

日本のYWCAでは、女性に対する暴力について、先駆的な取り組みを行い、被害者支援や啓発活動に力を入れてきました。しかし、デートDVについては、まだ十分な取り組みがなされているとは言えません。若い女性の育成を目指すYWCAとして、今年のWeek Without Violenceを機に、各YWCAが、若い世代における恋人からの暴力に一層目を向け、加害者も被害者も生まないための活動を始めてみてはいかがでしょうか。

（日本YWCA常任委員）

エンパワーするNGO
YWCA

緊急国際協力募金：ミャンマー（ビルマ）のサイクロン被災者支援募金報告

2008年５月にミャンマーを襲ったサイクロンによる被災者への緊急国際協力募金にご協力いただき、感謝申し上げます。日本YWCAはミャンマー YWCAが行なう被災者救援を支援し、６月に世界YWCAを通して30万円を送金しました。その緊急支援金の使途と感謝の報告が届きましたので、お知らせします。

ミャンマー（ビルマ）のサイクロン被災者支援報告書（抜粋）

●日本YWCAからの支援金への感謝と報告

現地通貨に換算して、2,657,800K（チャット。以下K）をDaydaye'群区、デルタ内のNay Yaung Kar村の救援活動に用いました。村人は日本YWCAからの支援を心から感謝しています。

収支明細	収入：日本YWCAより	2,657,800
	支出：１．橋の修繕	1,000,000
	２．制服の支援（5,000×140）	700,000
	３．女性世帯主への資金援助	957,800
	計	2,657,800
	差し引き	0

●支援概要

１．生活を支える橋の再建

７月４日、ミャンマー YWCAスタッフは被災地であるデルタ内のNay Yaung Kar村で、村の長老・当局者・代表者と会談しました。彼らは最重要課題として、橋の再建をあげました。この橋は、子どもたちが学校へ行くなど様々な用途に使われていました。また、８つの村を管轄する地方衛生センターともいえる病院がこの村にありますが、患者は橋が使えないため、通院に非常に多くの時間を費やしています。

橋の再建には、総額1,500,000Kが必要となる見通しで、村人たちはその内500,000Kを自分たちで集めようとしています。ミャンマー YWCAは残り1,000,000Kを援助しました。村人たちは責任をもって長期的に利用可能な橋の再建をすると約束しています。

２．子どもたちの制服

300人の子どもたちのうち、140人の制服が必要です。ミャンマー YWCAはそれぞれに5,000Kを制服代として援助しました。

３．家族を率いる女性たち（夫をなくした女性を含む）への資金援助

家族のために再び働きたいと思っている女性たちへの資金援助です。ミャンマー YWCAは総額957,800Kを、彼女らがビジネスを始めるための資本金として援助しました。

４．ミャンマー YWCAの働きについて

７月になり、村人たちはすでに田畑を耕し終え、稲を育てています。村の救援活動を行なうコミュニティ開発委員会の発足に向け、私たちは村人を動かし、励ましてきました。開発委員会発足の重要性に気づいてから、彼・彼女らは非常に熱心に、近隣の村に救援活動の委員会発足の提案をしています。村人たちは一層協力的になり、お互いを気遣い、村のニーズに気づくようになっています。

（翻訳協力：山根朋子）

中高YWCA　夏のカンファレンス
出会いを通して自分自身をみつめ新たな発見

今夏も全国３地区で中高YWCAカンファレンスが開催され、19校228名が参加した。

野尻湖にて

東北・北海道地区は「ハンセン病施設 新生園に学ぶ―追いやられていた人々に聴く」をテーマに、東北新生園を訪問して人々の証言に耳を傾けた。担当校は宮城学院。正しい知識の不足から人々を隔離し、さらに差別と偏見の故につい最近までその生活と未来を奪ってきた事実、今なお親族の元に引き取られることなく納骨堂に並ぶ遺骨の数々など、重い歴史に目を開かれる時だった。また、「人権」という大きな課題を各校がテーマをしぼって発表した研究は、「聴覚障がいと手話」「いじめ・不登校」「性同一性障がい」「水俣病」など、どれも日頃の活動を通した関わりや自分たち自身の悩み・痛みから問題を考え、学んだ成果でもあった。自分を知り他者を知り、互いの違いを越えて共に生きることの大切さを味わった３日間と言えよう。全員でドッヂボールに興じたり、静まってキャンドルサービスの夕べを過ごすなど、それぞれが役割を持って作り上げたカンファレンスは、宮城学院チャペルでの閉会礼拝で幕を閉じた。

関東地区は、東京YWCA野尻キャンプ場を会場に、「自然の中で人生を考える」をテーマに三谷高康さん（桜美林大学教授）の講演と聖書研究を通して深めていった。担当校は捜真女学校。自然には大きな力がある。野尻の森の中で一緒に経験したランプ生活やネイチャーゲームは、皆を緊張から解きほぐしてくれた。高台の大木にロープをかけて作ったブランコに乗って大声で叫んだ経験は、彼女たちの人生の新たな１ページに記されたのではないだろうか。偶然にもキッチンスタッフのおばさまたちが、元学校YWCAのメンバーであった。「当時野尻でのおいしい料理のもてなしに感動して、今ボランティアとして心を込めてみなさんに料理をお出ししています」という。これも新たな１ページに記しておきたい出会いであった。

関西地区では、「Realize your Mission」をテーマに金沢に集った。担当校は北陸学院。「今は見つけられなかったり、ぼんやりとしかわからなかったりするけれど、必ず神さまから与えられている自分の使命に気づくときがある」と開会メッセージで知らされたこのテーマを探って、若い３名の女性たちから、気づきのきっかけとなった出会いや、喜びをもって携わっている仕事への思いを伺った。グループディスカッションの中で、「進学したい学校があるけど、下宿しなければならないので親に反対されている」とつぶやいた一人の高校生。帰り際には「自分がやりたいことだから、もっと話してわかってもらうようにしたい」と笑顔となった。今回のカンファレンスでの出会いこそ、彼女にとってのRealize your Missionだったのかもしれない。金沢の街をフィールドトリップした。「まいどさん」と呼ばれる地元のボランティアのガイドさんの研修を受けて、北陸学院の生徒たちが「こまいど」となって皆を案内してくれた。

どの地区も担当校のホスピタリティにあふれたカンファレンスであった。出会いと語り合いの中で自分自身をみつめ発見するYWCAのカンファレンスは、今後、彼女／彼らたちが歩む道に大きな影響を与えていると実感している。

中高YWCA委員会

ご協力ありがとうございます

賛助費（以下敬称略）
廣田容子　町田裕子　伊藤富美子
今堀愛子　秋元靖子　井沢須美子
江上幸子　田中宏子　樋口美枝子
江﨑啓子　山田美代　松村ユカリ
小林和子　佐渡スズ　藤沢貴代子
桃井明男　岡崎敏雄　石原千賀子
古川道子　阿部方子　村山公実子
吉岡郁子　中尾廣美　小谷野淳子
甲子敏江　甲子雅代　籏　眞紀子
土橋克子　荒木紀子　長尾真理子
米原靜子　阿部有三　仁木三智子
井上裕美　一杉静子　吉村恵理子
茂木玲子　遠藤洋子　和田千鶴子
松下倶子　熊谷麻子　高月三世子
鈴木伶子　寺島順子　大野美知子
森田矩子　小川和子　木下由美子
押渕礼子　眞野あや　稲垣美栄子
和田崇子　野村春江　江尻美穂子
荒川知子　石川松子　田中美紗子
小谷充子　中村秀雄　朽木美奈子
岩崎俊夫　中橋美鈴　榎本富美子
塩見牧雄　塩見志保　谷山久美子
黒木順子　船本弘毅　平岡千代子
佐藤待子　石原清美　三股まさ子
村松幸子　比企敦子　岩崎妙子
西野和子　渡辺京子　須藤和子
渡辺聰子　石川紀子　安武留美
玉生邦子　小尾充子　安田寛子
田崎桂子　大澤康子　小池久子
千葉シン　森　克子　旦　節子
萩原　正　鈴木　榮　嶋田　紫
ギッシュ陽子

世界YWCA賛助費
石川松子　高月三世子

平和教育資金
藤原玲子　黒木順子

オリーブの木募金
京谷信代　甲斐良子　野村和子
板橋幸子　木部由美　木部みつる
辻村裕子　宮良志帆　三股まさ子
塩見牧雄　塩見志保　玉木けい子
森田武夫　滝澤紀子　木村峻太郎
水島有斗　一色義子　佐々木利恵子
加藤　茂　川野　翠　函館YWCA

国際協力募金「ジンバブエ支援」
青木浩子　中村サダ子　田中美智子
石川松子　仁木三智子　高月三世子
郡　恭子　原　万里子　中西トク子
福島YWCA　新潟YWCA
平塚YWCA　静岡YWCA
浜松YWCA　函館YWCA
東京YWCA武蔵野センター

国際協力募金「ミャンマー（ビルマ）のサイクロン被災者救援募金」
安江恵津　中村サダ子　仁木三智子
郡　恭子　原　万里子　加藤美恵子
石川松子　酒井真紀子　田中美智子
青木浩子　高月三世子
プール学院高等学校・中学校
福島YWCAエコクラフトバックの会　東京YWCA武蔵野センター
甲府YWCA　福島YWCA
新潟YWCA　広島YWCA
浜松YWCA　浦和YWCA
札幌YWCA　釧路YWCA
函館YWCA　平塚YWCA
静岡YWCA

国際協力募金「中国四川省大震災被災者救援」
安江恵津　中村サダ子　田中美智子
郡　恭子　原　万里子　酒井真紀子
石川松子　仁木三智子　高月三世子
田中弘子　青木浩子　静岡YWCA
甲府YWCA　福島YWCA
新潟YWCA　浜松YWCA
札幌YWCA　浦和YWCA
釧路YWCA　函館YWCA
横浜YWCA　湘南YWCA
平塚YWCA　広島YWCA
東京YWCA武蔵野センター
東京YWCA砂土原センター
福島YWCAエコクラフトバックの会　プール学院高等学校・中学校

国際協力募金「ケニア暴動被害救援」
旦　節子

国際協力募金「緊急国際協力募金」
須藤和子　籏　眞紀子　神戸YWCA

パレスチナYWCA支援募金
高月三世子

一般寄付
唐崎旬代　小林和子　匿名

（2008年8月20日現在）

特集

たくさんの元気と少しの勇気を！

DVをなくすために

保育園における、母子へのDV&虐待の予防とケアの取り組み

大阪YWCA

　大阪YWCA女性エンパワメント部がDVや虐待被害者のために「ステップハウス」事業に取り組んで3年になります。現在私は、社会福祉法人大阪YWCA大宮保育園の園長の任に就き、会員として女性エンパワメント部委員会に属しています。

　DVや虐待予防に関しては乳幼児期からの啓発の必要性を強く感じており、日頃から保育園児の親子関係や、地域の子育て中の方を対象に、「子育てが楽しくなる心の持ち方」などのプログラムを試みていました。そんな折、幸いに（財）松翁会・社会福祉助成金を受けることができ、「保育園における母子へのDV&虐待の予防とケアへの総合的取り組み」を実施しました。

　この事業は、地域の見守りがDVや虐待を未然に防ぐことにつながると考えていたことから、実際に保育園と地域の援助者の方たちとつながることができる活動へと発展していきました。

　その主な取り組みは次のとおりです。

①地域の援助者との合同研修会（保護司、民生児童委員、保育・教育関係者、保護者等）
②新入園児保護者向けのプログラム〝親子関係がハッピーになるために〟
③子ども（4～5歳児）のためのプログラム
④おかあさんのためのハッピースタディーズ（母親支援）
⑤食を通しての交わり（保護者が先ずストレスから解放されるように）
⑥希望者へのカウンセリング
⑦講演会〝命の尊さについて〟〝生きる喜び〟とともに癒しのコンサート

　以上の取り組みを通して、地域の多くの援助者との交流の場をもつことができたのは、今後のネットワーク作りの第一歩になりました。

　母親支援のプログラムで気づいたことは、パートナーとの関係が最もストレスを引き起こす要因になっていることでした。

　そのため母親だけのプログラムを両親（りょうおや）支援のプログラムに広げたり、会食会など食を通しての交わりを大事に考えました。

　参加されたどのお母さんからも「昨夜、夫は帰宅してずっとしゃべりづめで上機嫌でした。会が楽しかったようですね」「私も子どもの気持ちに寄り添い少し待つことにしました」という報告がありました。お母さんやお父さんたちがありのままを受け入れられ、気軽に語り合う場を持つことは、日ごろのストレスから解放され虐待防止につながることを確信しました。

　また子どもプログラムでは、「たとえ親であれ暴力は許されないこと」「お友だちが好きなように自分も大好き」という自尊感情を育む機会が与えられたのは大きな恵みでした。女性エンパワメント部委員会顧問の金香百合さんからもたくさんの支援をいただいて、充実した学びと気づきの場になったのは本当に感謝でした。

大阪YWCA　太田麗子

暴力を経験した女性支援のグループづくり～実践トレーニング講座

東京YWCA

　この夏も、アメリカ在住の吉浜美恵子さん（ミシガン大学社会福祉大学院准教授）を講師に招いて「暴力を経験した女性支援のグループづくり～実践トレーニング講座～2008」を行いました。東京YWCAに女性の人権委員会ができて3年目にこの講座を開き、今年で3回目になります。フェミニスト理論に基づいてグループワークをワークショップで教えられる人が日本ではいないため、吉浜さんを招いています。

　2008年は、全国的な広報と、3日間連続の日程（8／1～3、全15時間）のためか、遠い地域からも応募があり、予想以上の申し込みがありました。過去2回の受講者は44名（リピーター含む）、今回の25名が加わり、これまでに69名の講座修了生が誕生しています。

　受講者は、公的機関の相談員・NPO支援団体の所属者・支援者として勉強中の人・過去に暴力を経験した人・隣接職種の人等さまざまです。そして、現在グループを行っている人も、作ろうとしている人も、どのようにしていけば良いのか手探り状態でいることが応募動機から見えます。また個人のカウンセリングだけではなく、同じような経験を持つ仲間がいるグループの必要性が高まってきていることを感じました。それが、多くの人の応募につながっていると思います。

　この講座の特徴は「実践」と銘打っているように、体験型の講座です。最初は戸惑うこともありますが、時間が進むにつれ、皆、自分なりに学び方を得ていきます。講座は「支援としてのグループづくりであり、ファシリテーションであること、そのためには？…」ということを全部の時間を使って学んでいきます。1日の終了時には「頭がグルグルしている」「ぱんぱんです」と言う声が聞こえます。それだけ皆が集中し、凝縮していきます。また、この場は吉浜さんがファシリテーターであり、受講生がメンバー、という大きなサポートグループであると言えます。それを作り出しているのは吉浜さんですが、産業革命以降グループワークを得意としてきたYWCAならではの講座と言えます。グループワークと言えば、私たち女性の人権委員会もグループワークなのです。

　この7月には、その延長線上にあり、念願であった「暴力を経験した女性のためのサポートグループ（全5回）」を開くことが出来ました。講座修了生がファシリテーターです。

　今後、他地域のYWCAとも連携して「暴力を経験した女性の支援」に携われればと思います。一歩一歩ですが、グループワークのYWCAらしい歩みになっていると思いませんか？

東京YWCA　和泉友子

名古屋YWCA作成

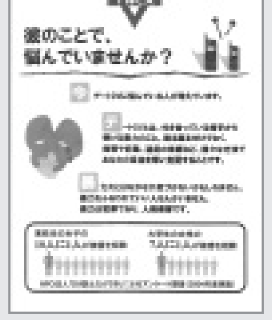
パープルリボンのストラップ

パープルリボンは女性に対する暴力をなくそうというシンボルです。女性が安心して輝ける社会を目指して、パープルリボン携帯ストラップを身につけて意思表示をしてみませんか！「No Violence」と刻まれ、ピンクの小さな石があしらってあり、裏にはYWCAと刻まれています。

定価500円。20個以上は送料無料です。

デートDVリーフレット「彼のことで悩んでいませんか？」

デートDVの啓発のために名古屋YWCA「まちかどサロン」（DVの経験者が気軽に話せる場）のメンバーが作ったA5サイズのリーフレットです。彼との関係を考えるチェックリストやデートDVに気づく警告サインなどが書かれています。コンパクトながらわかりやすいと好評で、高校での授業や啓発の講座で配られています。



彼のことで、悩んでいませんか？

ご注文・お問合せは名古屋YWCA〈052-961-7707〉まで。

種

正義を洪水のように
恵みの業を大河のように
尽きることなく流れさせよ。
（アモス書　5章24節）

「見えぬけれどもあるんだよ」。（＊）深海にもたくさんの生き物がいるように。心の中にいろんな思いがあるように。「見えぬものでもあるんだよ」。（＊）言葉にできない痛みやうめきが、聞き届けられない叫びや思いが、今でも洪水のようにあふれている。

　暴力。それは相手を自分の思い通りにし奪うために、相手の声を封じ込め従わせるために、自分自身を主張し優位に立つために、人間が用いてきた愚かな行為。そこで奪われるのは、人と人との信頼と絆。幸せになろうとする意志。自分自身がかけがえのない大切な存在であるという尊厳。生きる力。相手を思いやる心。

　せっかく声を上げても、再び見えなく、聞こえなくされる。叫びに、痛みにだんだん麻痺してくる社会があるのも現実。それでも溢れる悲しみの大波はうねり続けるだろう。暴力を越えて、私たちは互いに異なる相手を受け入れ、尊重し、大切にし合っていくことができるだろうか。「正義を洪水のように　恵みの業を大河のように　尽きることなく流れさせよ」と叫ぶたくさんの声が聞こえてくる。たとえできることは小さくても、この内なる「声」に気づき、フタをせず、応答していくものとなりたい。

（＊）金子みすゞ「星とたんぽぽ」、『金子みすゞ童謡集』、角川春樹事務所、1998年

菊地恵美香（日本キリスト教団六角橋教会牧師・横浜YWCA会員）

ひろしまの産婦人科医として

8月に実施した「ひろしまを考える旅」の基調講演では、広島在住の被爆2世である河野美代子さんが、産婦人科医として命に向き合う中で見える、社会が抱える問題をお話くださいました。旅に参加した、中高生や大学生を対象にした河野さんのお話を紹介します。

河野美代子さん
産婦人科医。著書に『新版さらば悲しみの性』（集英社）・『河野美代子の更年期ダイアリー』（高文研）、他。

「わが子同様大切な教え子を、全員死なせてしまった。戦争は私の価値観を180度変えた」。父が、戦後すぐ生まれた私たちを育てる中で、常々言っていた言葉である。程なく生まれた、主権在民・男女平等、さらに戦争放棄まで謳った憲法は、多くの疲れきっていた国民に安堵感を与えた。

　廃墟の中から喜びをもって生きることができる、そういう教育を受け、中学生になった私はいろいろなことに目覚めた。私の校区には被差別・在日朝鮮人の方の部落があり、その子どもたちが60%という学校で私は育った。すべてが焼き尽くされたあの廃墟の中でも、その差別は厳然と生き続けた。そんな中、先生方の方針により、差別の構造、人が人を差別する不条理への憤り、不正義に対して怒りを持つということをしっかり学んだ。多感な年頃に受けたその教育は、私自身のその後の生き方に大きく影響を与えた。

　大学に入り被爆2世を中心に原爆の被害について調べていくと、日本がアジアの国々に侵略していった厳然たる事実に突き当たる一方、「非国民」といわれながらも戦争に反対し、投獄され、拷問を受け獄中死していった人もいる。戦争全体を見る中で、原爆の被害を考えなくてはならないということを学んだ。ただ、あれだけの地獄の苦しみを受けた被爆者に向かって、何の被害も受けなかった人に「あなたも加害者だ」と言わせることは許さないという姿勢は持っていた。私たちは「三たび核を使うことは許さない。憲法9条をまもろう」ということを打ち出し、また被爆者への激しい差別のある中、「被爆者の血の流れを絶やさない。子どもを生もう」ということも打ち出し、被爆者の運動を継ごうと決心した。

　当時、広島大学産科・婦人科教室は、胎内被爆による知的障がいを伴った「原爆小頭症」を社会に知らせた。私はそのことと、被爆者の遺伝的なことを研究したいと思い染色体研究室に入り、そこで多くのことを知ることになった。その一つは、戦後、比治山にできた米国の調査機関ABCC（原爆傷害調査委員会）が、被爆者の身体の隅々まで調べることにより、原爆による人体への被害の実態について、おびただしい数の論文が、日本人に対してではなく米国人に対して書かれていることであった。その論文を必死で読んだ。子や孫に発生する染色体異常、これは事実です。あれだけの放射能を浴びるわけだから卵・精子に異常が発生しても少しもおかしくない。ここに一般の武器と異なる核兵器の残酷さがある。核兵器は、人類を根底から滅亡させる兵器である。

　ほとんどが〝命〟にかかわる重大ながん患者と向き合う大学病院での10年間は私に〝命の重み〟を教えてくれた。生きたい、生き続けたい、でも病のためにその命が奪われていく。どんな人の命も何物にも変えがたく重いという否定し難い事実を学んだ。だから私は死刑にも反対する。

　その後開いたクリニックでは若者の受診が大変多くなり、若者から学ぶことが多くあった。若者の持つ真っ直ぐさ・純粋さ・パワー。しかし同時に若者は性についてなんと知識がないことか。セックスについて知識を持っていなくても、また間違った知識を持っていても行動は取れる。その結果がどんなことになるかもつぶさに見てきた。また今まで小学生の出産を2人取り上げたが、2人とも許せない性犯罪の被害者であり、11歳の子を妊娠させる男がいたということ、女の子だけを見るのではなく妊娠させる男がいたということをしっかり見なくてはいけない。ここが日本の教育で欠落しているところである。性に関する情報は渦巻き、若者はその中にどっぷり浸かっているが、正確な情報は本当に与えられていない。それは政治に関わることである。近年、日本政府の方針は性教育はしてはならない、性教育は若者をそそのかすというものであり、性教育は冬の時代を迎えている。

　社会が右傾化し、憲法9条が変えられようとする中で、皆さんしっかり今の政治状況を見つめてほしい。日本の宝物である憲法は、高いハードルでまもられていると聞かされてきたのに、そのハードルがすでに低くされてしまった。「命」をテーマに考えると、平和教育・性教育・人権教育は一つにつながっているということを、医療に携わる日々のなかで強く実感している。

（文責・編集委員会）

ひろしまを考える旅2008

私が平和の種です

今年の「ひろしまを考える旅」は8月15日（金）～18日（月）に実施され、海外11カ国からの参加者も含む10代～70代までの約100名が、原爆資料館を見学し、被爆者から直接体験を伺い、共に多くを語り合いました。参加者の感想を紹介します。

●今回のこの旅では、たくさんのことが学べました。爆心地は原爆ドームではないこと、遺骨が平和公園や広島市内にたくさん埋まっていること、原爆が落ちた当時のことなど、学校などで原爆のことは何回も習ってきたはずなのに、表面上のことしか知らず、本当の事実を実際に見たり、被爆した方々から聞いたり、非常にいい経験をしました。被爆した方々が高齢化していく中で、今度は私たちの世代のより多くの人が、原爆の事実を知り、平和の大切さ・戦争の愚かさを伝えていかなければならないと強く感じました。核兵器が開発され、アメリカでは原爆投下は正しかったといっている人がいる中で、それは間違っていると伝えることも大切だと思いました。**高橋理香（恵泉女学園中学3年）**

●初めは、言葉も通じなくて、どうやって持ちこたえられるだろうかと不安でしたが、参加されたすべての皆さんが親切に接してくださり、本当に良かったです。この旅を通して、戦争のことが本心から分かるようになり、どれほど残酷で悲しく、涙の出ることだったのか、改めて感じるようになりました。また、ヒロシマについて知ることが出来ただけではなく、さまざまな国の留学生たちと分かち合った話を忘れることはできないと思います。たとえ言葉が通じなくても、平和を考え、実践する心はお互いに共通しており、同じ意思を持っているので、平和がさらに身近になったのではないかと思います。またこのような機会が与えられれば、もう一度参加したいです。このような経験と思い出を作ってくださった日本YWCA・韓国YWCA、そして参加者すべての皆さんに心から感謝申し上げます。私たちは、平和を構築する一人のリーダーとして、考えているだけではなく、実践する人になりたいと願います。皆さん、お疲れさま。一期一会。**ソン・チョンヒ（韓国・蔚山YWCA　キョンサン大学2年）**（原文　韓国語／翻訳　鹿野幸枝）

●「戦争をしない」ことが日本国憲法に謳われていることに感銘を受けました。これは、平和を確かなものとする明確な誓いです。平和は、国籍・性別・宗教・年齢に関わらず、すべての人の責任です。戦争は権力者の武器です。しかし市民は、どこの国の人であろうが、戦争により身体的に精神的に、想像を絶する長い期間、苦しみを受けなくてはなりません。いずれの戦争の犠牲者の子孫たちも、平和を求めてベストを尽くしています。私はこの責任を、生きている限り抱き続けます。**林葉（中国　北京YWCA会員）**（原文英語）

●3日間にいろいろなことを経験し、本当によかった。学んだこと全部忘れたくなく、前向きに生き続けたいと思う。平和は確かに保つことが難しいが、1人でなく、皆の力や協力が非常に大事だと思う。私は時々言いたいことや思いついたことなどを伝えないことが多い。主な理由は相手に自分のことをどう思われるのか気になり、いつもネガティブなイメージだと思った。しかし今後はそんなことは思わず、自分の伝えたいこと・やりたいことをちゃんと伝える。その上で、世界（人・自然）が平和になるように活動しようと思い、すてきな世界に生き続けるように祈る。自分の体内に息がある限りがんばりたいと思う。**ハジモハド　ハルン　ハミザ　ビンデイ（ブルネイ　東京農工大学2年）**（原文のまま）